

駿建

2014 Oct. Vol.42 No.3

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

)*&\$!&,-%./*&#+,%/0

1!2+&\$3!#\$%/0%4&56'\$!5\$*&!7%8/,,!9!%/0%;5'!#5!%+%;%<!56#/,/9-=%>'6/#%?#''!&@'\$-
A%1!2+&\$3!#\$%/0%4&56'\$!5\$*&!%+%;%B'''#9%1!@'9#7%>'6/#%?#''!&@'\$-%.*#'/&%8/,,!9!

/01'23,%413(561

Interviews with Award Winners of 2014 Architectural Institute of Japan Prizes

日本建築学会各賞2014

受賞者 非常勤講師スペシャルインタビュー



Special Feature

Interviews with Award Winners of 2014 Architectural Institute of Japan Prizes

日本建築学会各賞2014

受賞者 非常勤講師スペシャルインタビュー



建築の世界には、国内外さまざまな賞が存在する。その中でも、日本建築学会賞は、国内で最も権威のあるとされている賞のひとつで「論文」「作品」「技術」「業績」の4部門からなり、建築作品だけではなく、研究や業績など、さまざまな側面から表彰されるものだ。

特に日本建築学会賞(作品)は、国内の建築家に与えられる最高峰の賞。これまでに卒業生の高宮眞介、山本理顕、白江龍三、水谷碩之、山本長水、渡辺明、金田勝徳、椎名英三、梅沢良三、また常勤もしくは非常勤として教鞭を執る(過去に執った)小泉雅生、飯田善彦、西沢立衛、横河健、坂茂(受賞順)などが受賞している。

今年も2014年4月に、各賞が発表された。昨年は該当なしとして話題となった、日本建築学会賞(作品)を、短大非常勤講師の内村綾乃先生らの設計による「SHARE yaraicho」、大学院非常勤講師の山梨知彦先生、羽鳥達也先生らの設計による「NBF 大崎ビル(旧ソニーシティ大崎)」が受賞。また、卒業生で建築学科非常勤講師の菅原大輔先生による「森のオフィス」が日本建築学会作品選集新人賞を受賞した。

今回は、特集として、受賞者のみなさんに話をうかがった。作品の裏側にある、考えとは!? 3つの突撃インタビューをお楽しみください。

**建築家がもっともっと、
これまでにないものを
提案していかなくてはいけません。**

賞の名称：2014 年日本建築学会賞（作品）
受賞者名：篠原聡子（空間研究所代表）＋内村綾乃（A studio 主宰）
受賞作品名：SHARE yaraicho
建築用途：専用住宅（シェアハウス）
竣工年：2012 年

日本建築学会賞（作品）は、近年中に国内に竣工した建築の設計（庭園・インテリア、その他を含む）の中から、技術・芸術の進歩に寄与した優れた作品に送られるもの。

まずは 2014 年日本建築学会賞（作品）受賞作のひとつ「SHARE yaraicho」を訪ねました。

神楽坂駅から徒歩数分。ここは都心に位置する 7 人のための小さな新築のシェアハウス。

しかも、設計者のひとりである内村綾乃さん自身が住んでいるといいます。

建物の前に立ってみたら、なんとファサードが膜材で、玄関はファスナー!?

「いらっしゃい!」

ファスナーを開けながら、内村さんは脚から登場しました。

インタビュアー＝古澤大輔 助教、佐藤慎也 准教授、田中元子 /mosaki



エントランスを入ると作業場 1 のスペース



内村綾乃（うちむら・あやの）：1967 年東京都生まれ。1990 年日本大学生産工学部建築工学科卒業。1990-98 年空間研究所勤務。1998 年 A studio 設立。2005-11 年日本大学短期大学部非常勤講師。2009-11 年日本女子大学非常勤講師。2013 年 - 日本大学短期大学部非常勤講師。2014 年 - 日本大学生産工学部非常勤講師。

—— 今回の作品は篠原聡子（日本女子大学教授／空間研究所主宰）さんとの共同受賞ということですが、協働で取り組むことになった経緯を教えてくださいませんか。

内村：実はお施主さんがこの土地を購入してから 5 年ほど経っています。もともとは収益物件として、篠原さんが単身者用の集合住宅を設計していたのですが、時間の経過とともにワンルームタイプの集合住宅以外の住まい方を提案することになったのです。そのタイミングで、一緒にやらない？と篠原さんから誘いを受けたのがきっかけです。

—— 設計を進める上で、篠原さんと役割分担はあったのですか。

内村：特にはっきりとした分担はしませんでした。コンセプト的な部分は篠原さんが主体となって、空間の構成については議論しながらプランニングに落とし込んでいきました。ディテールや詳細の検討は私が主に担当していたと思います。

—— 箱状のヴォリュームが一定の距離感を保ちながら、立体的に折り重なる建物の構成になっていますが、これは早い段階から決まっていたものなのでしょうか。

内村：まず日影規制を受けない最大高さである 10メートル以下で3階建てという全体の大きさは、私が関わる前からほぼ決まっていました。空間構成については、入居者同士の距離感を保ちつつ、視線や風が抜ける流動的な空間のあり方が、スタディを進める中で出てきました。

—— シェアハウスという用途になる前から建物の大きさは決まっていたのですね。ちなみに、どのような経緯でシェアハウスという用途になったのでしょうか。

内村：この敷地の規模で普通に設計すると 30 m

程度の住戸が 6 戸くらいのワンルームアパートになってしまうのですが、それほど大きくない敷地に同じような水廻りが 6 セットもあるのはどう考えても合理的ではありませんし、空間が豊かだとは思えません。できる限りシェアするほうが良いのではないかと考えるようになりました。そこで、住まいに関する実態調査を行ったりする中で、シェアハウスの需要はあるのではないかと思います。踏み切ることになりました。

—— シェアハウスって、例えば入居者の人数に対しての水廻りの大きさがどれくらいであれば最適なのかとか、計画的な指標がまだまだ不足していて、計画の妥当性を判断するのが難しいと思いますが、その辺はいかがでしたか。

内村：どれくらいまで許容できるのかというのは、7 人という少し大きめの家族を想像すれば良いですから、なんとなく大丈夫という直感みたいなものはありました。リノベーションでのシェアハウスはこれまでもあるけど、さらに増えていてニーズもあるし、社会的な意義もある。経済性というよりは住まいのあり方をどう提案できるかが、新築でのシェアハウスの醍醐味でした。「これでいける」という根拠の無い自信を勝手に持っていました（笑）。

—— 設計者である内村さんご自身が、入居者としてこの建物に住まわれているわけですが、最初、他の入居者さんたちはどのように募集されたのですか。

内村：私含めて 7 人が住んでいるのですが、5 人は知り合いの方たちで早い段階から入居することが決まっていました。あとの 2 人はタカギプランニングオフィスさんに公募をしていただき、面接という形でお会いしました。でも、実は 2 人しか応募がなかったのですが（笑）。

—— 面接の結果、そのおふたりに決められたわけですね。何がポイントになりましたか？

作業場 1 から見上げる



作業場 1



2階テラスから1階作業場1を見下ろす



外から玄関を見る



外観



内村：やはり一緒に暮らすことになるわけですから、相性が合う、合わないは大事だと思っています。明確な基準は無いのですが、この人だったら合いそうだな、という直感的な部分が重要ですね。偶然にも今回2人も相性が合うだろうなと思いました。特にお酒を飲むのが好きかどうかは重要なポイントです(笑)。

—— 今後退居していく人も出てきますよね。その場合は、どのように募集されていく予定でしょうか。

内村：また公募しても良いのですが、なんというか大々的に募集するというより、知り合いづてで紹介していただくのが良いかなと思っています。あるいはこの建物を見学に来てくれた人たちの中で、住みたいと言ってくれる方もいるので、そういった方に声をかけていこうかなともっています。いずれにせよ小さな規模ですので、顔が見える関係を大事にしたいと思います。

—— 7人がシェアハウスで暮らす上で、どんな生活のルールがあるのですか。

内村：結構ルーズなところが多くてあまり規則の

ようなものはないのですが、「ゴミ出し」や「掃除」など、1人ひとつ必ず何かしらの当番を担当することにしました。全部で7つ当番が必要なのですが、最初の頃は、ひとつ足りなかったので、「挨拶当番」というのもつくりました。とにかく積極的にあいさつするというだけのものです。すぐなくなりましたが(笑)。それぞれの担当を1週間7日間でローテーションしています。はじめの1年ほどは週に1回土曜の朝に入居者が集まって、コーヒーを飲みながらミーティングを行っていたのですが、2年半経ち、特に問題も起きていないので今はミーティングという形では月に一度くらいになっています。

—— 自分たちでルールを決めていくのもシェアハウスならではの楽しさかもしれませんね。一番問題になるのが水廻りかと思うのですが、例えばお風呂を使う時間帯などの決まりはあるのでしょうか。

内村：厳格なものではないのですが、朝入るか夜入るか、暗黙の了解で朝派・夜派の棲み分けは自然とできましたね。女性は夜で男性は朝が多いです。霞ヶ関方面に勤めている入居者の方がいて、その方はいつも必ず決まった時間、朝の7時に入るので、他の人は7時を避けるという暗黙のルールがあったり(笑)。

—— 今回案内していただいて、空間構成や方法論から建築の作品性を語るのではなく、住まい方、あるいは使い方という点で建築を語られているのが興味深いと思いました。

内村：やっぱりシェアハウスっておもしろくて、お施主さんがプロジェクトに積極的に関わるといって、建物の運営の仕方をみんなで議論できるので、何かそこに可能性を感じるんです。

—— ご自身が住まわれていることで何か変わったことはありますか。

内村：実は今まで事務所兼住居として使っていたマンションがあるのですが、そこは他人に貸すことにして、こちらでシェアすることを選びました。自分の設計事務所は篠原聡子さんのアトリエの空間研究所を、これまたシェアさせてもらっています(笑)。シェアってわずらわしいことはもちろんあるんです。けど、このわずらわしさが逆に自分にとってとても良い経験になっています。

シェアするためにはルールをみんなで決め

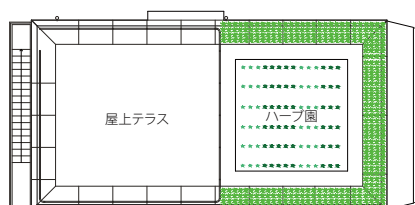
3階ダイニング

3階キッチンからダイニングを見る

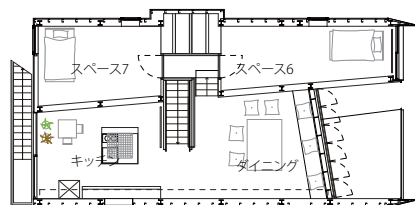
2階から階段室越しに3階キッチンを見る

2階から1階を見下ろす

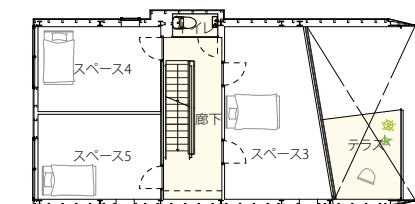
1階作業場2



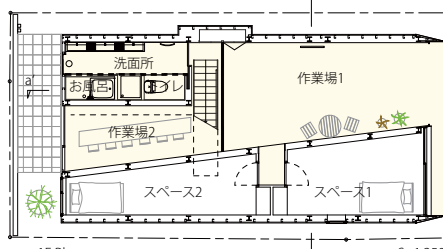
Roof Plan



3F Plan



2F Plan



1F Plan

S=1:250

たり工夫が必要ですし、わずらわしいこともある一方で、それらがとてもクリエイティブなのです。今後もシェアハウスを提案していくとしたらどのようにしますか。

内村：やはり建物のオーナーさんをどのようにプロジェクトに関わらせていくかを考えています。規模が大きくなるとビジネス色が強くなってしまいうので、今回のような規模に対して提案していければ良いですね。どのように暮らすべきなのか、暮らすことができるのか、建築家がもっともっと、これまでにないものを提案していかなければいけないと考えています。

—— 今後、シェアハウスが「終の棲家」になることって出てくると思うのですが、シェアハウスで人生を終えることってどのように思いますか。

内村：サ高住（※サービス付き高齢者住宅）のオルタナティブのようなシェアがあれば良いと思っています。生活が成熟していく中でさまざまな住居のバリエーションが必要だと思いますね。

—— 周辺地域の皆さんのは、ここをどのような場所として捉えられているのでしょうか。

内村：まさにそれはこれからの課題なのですが、やはりシェアハウスっていうのがまだまだ理解されていないので、建物の中でどのようなことをやっているのかを知ってもらうことは大事だと思います。この建物ができたときに、1階の土間スペースでパーティを開いて、近隣の人も何人か来ていただきました。また、町内会の班長を入居者の間で月ごとにローテーションして担当したりしていましたが、これからの活動の中でもっと地域とのかかわりを考えていきたいと思っています。

—— 内村さんは本学生産工学部のご卒業ですが、どのような学生時代を過ごされましたか。

内村：あのころは友人たちと湾岸地域を中心に、

新しくできた建築や都市をよく見学しに行っていましたね。あと、建築系のサークルに入っていたのですが、そのメンバーがお酒好きが多く、よくみんなで飲んでいました（笑）。

—— 建築家は、いつごろから目指すようになったのでしょうか。

内村：当時、生産工学部は1学年250人中16人しか女子がなくて、友人は男子が多かったのですが、その男子たちがみなアトリエ志望の建築少年だったので、自分も自然とアトリエ志望になっていましたね。

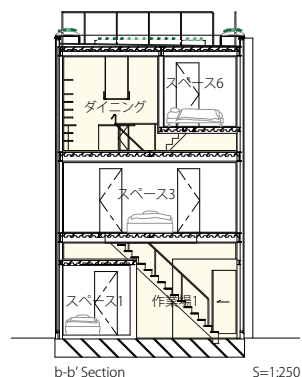
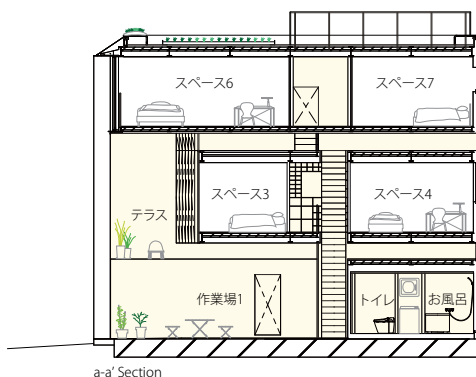
—— その中でも篠原さんのアトリエを希望されたのはなぜですか。

内村：若い建築家のところで勉強したいと思っていました。篠原さんは、当時まだ30代で、雑誌で活動を知って興味を持ちました。最初はアルバイトだったのですが、気が付くとスタッフになっていました（笑）。

—— 学生たちに対して、学生時代の過ごし方で、何かアドバイスがあればお願いします。

内村：学生時代はとにかく友人をつくることです。学生時代の友人たちとは今でもまだ付き合いがありますし、お互いに仕事上で助け合うこともあります。やはり持つべきものは友ですね。あと、そういった友人たちと旅行すること。建築行脚して議論をする。議論を通じていろいろな人の考え方を知るのが大事だと思います。また、お金はあまりもらえないかもしれないけど、設計事務所でアルバイトする。できればアトリエと組織事務所両方で経験することをお勧めします。

（2014年9月16日（火）東京・神楽坂、SHARE yaraichoにて収録）



いろいろな個性が集まる組織だから
こそ、チームで設計してつくりだせる
ものがある。

賞の名称：2014年日本建築学会賞（作品）

受賞者名：山梨 知彦、羽鳥達也、石原 嘉人、川島範久

受賞作品名：NBF大崎ビル（旧ソニーシティ大崎）

建築用途：オフィス

竣工年：2011年

日本建築学会賞（作品）の受賞作で、
もうひとつ大きな話題となったのが「NBF 大崎ビル（旧ソニーシティ大崎）」。
設計は日建設計の、山梨知彦さん、羽鳥達也さん、石原嘉人さん、川島範久さん（元所員）の4人。
山梨先生と羽鳥先生は、大学院の非常勤講師を勤める。

訪ねたのは、日建設計本社2階のマテリアルルーム。
4人のフラットでフランクな関係がにじみ出るアットホームなインタビューとなった。
受賞作品のこの建物、写真を見ると、一見何の変哲も無い巨大なビルに見えるのだが、
そこには今だからこそ辿りついた思想や技術がたくさん凝縮されていた。
未来を切り開く新しいオフィスビルはどう考えられ、どう生まれたのか！？

インタビュアー＝佐藤慎也 准教授、古澤大輔 助教



——今回の受賞について感想をお願いします。

山梨：アトリエ系建築家の人にとって、住宅がいろいろなものの原点だと思います。実は、ぼくらにとって、それがオフィスなんです。特に日建設計は「住友銀行本店」(1900)をつくるときにできた臨時の設計部からはじまっています。オフィスで受賞できたことは、原点に帰った仕事によって受賞できたという意味でうれしいです。けど、ぼくらにとって、オフィスがアトリエ系建築家の住宅に当たるといのは、なかなか組織事務所にいる人にしかな伝わらないのですよね。

羽鳥：住宅とオフィスは、都市の中の住む場所と働く場所、もっともたくさんあるものです。学会として、そういったベーシックなものの新しい方向性を示すものとして、「SHARE yaraicho」(2012)みたいな新しい集合住宅形式と、われわれが手掛けたユニークなオフィスが学会賞に推されたことは、すごく納得がいきました。

オフィスの新しい形式を、どのようにソニーという会社を通じてくれるかということにトライして、ぼくたちなりにできたと思っているものを社会的に認めてもらった。設計の思想であるとか、社会現象として建築をとらえて、その上で価値を判断していただけたのがすごくうれしかった。

石原：ぼくらが学生のときの感覚では、誰が見てもまったく違う、すごい形のものが学会賞を取るというイメージでした。このビルでは、視覚的にはシンプルな形であっても、温度という体感できるものによって、街に対しての影響力を与えられるものがつくれるんじゃないかと考えました。それが学会賞を受賞できたことはうれしかったです。

川島：大学在籍時は環境系の研究室に所属して設計・研究をしていたのですが、住宅スケールの内部環境制御が主なテーマでした。しかし、大規模建築では、外皮が内部に与える影響の割合は小さく、むしろ外部へ与える影響が大きい。それを逆手にとって都市における新しい建築のあり方を提案で

きないかを考えたプロジェクトでした。そういった建築が評価されたのは良かったと思っています。

——オフィスピルの計画という視点では、どのようなアイデアを考えたのでしょうか。

山梨：ワークプレイスとコアを分けたものの中では、**林昌二**(1928 - 2011 | 日建設計で、長くチーフアーキテクトとして活躍)たちがやったように、コアをどう置くかという話があります。また、分割しないでホモジニアスにつくってコアを消す動きがある。それから、コア&シェルというように、内部は変わりがいいから、外側がアイコニックであればいいという動きがある。この3つのタイプがほとんどを占めていて、オフィスはピュアでホモジニアスなユニバーサルスペースで、それをガラス1枚、極薄のカーテンウォールで切った瞬間に、後は中をどうつくるかという話がほとんどでした。カーテンウォールはすごく論理的ではあるけれど、まさにモダニズムが生んだもので、周りのコンテキストを切り離すんですね。サイトスペシフィックでも、プログラムスペシフィックでもない、孤立した環境をつくってしまう。オフィスはいろいろなことをやっているが、そこから出ていないという想いがありました。

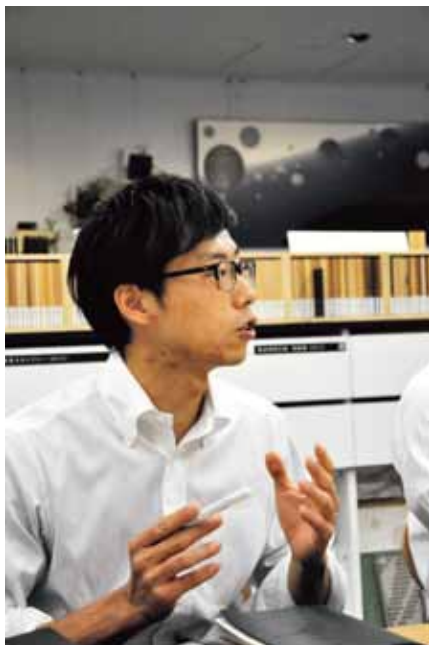
ソニーでは、バルコニーが付くことで、1センチのガラスの厚みが2メートルの奥行きになった。それによってワークプレイスと外との環境の新しい関係をつくっています。スキンは内外を隔てるだけでなく、巨大建築においても縁側のように内外をつないだり、それ以外の新しいファンクションを与えられるんじゃないか。ファサードがワークプレイスや都市に滲み出すような新しいインターフェイスをつくれると考えたのです。外皮を覆うバイオスキンは、パーツとして四角いビルにペチャッと付けたわけではなく、いろいろな条件の中から環境を引き込む必然的な装置として現れたわけで、切り離れた瞬間にオフィスも成り立たなくなる密接不可分なものです。



「NBF大崎ビル（旧ソニーシティ大崎）」
JR大崎駅に隣接した大規模オフィスビル。BIM（ビルディング・インフォメーション・モデリング）の利点を活かした建築として、審査員からは「既存概念にとらわれない合理的な創意工夫がなされている」とオフィスビルとしての革新性が高く評価された。目を引くのは、北東側のファサード全体に設けられた簾（すだれ）のようなルーバー。このルーバーには雨水を利用してヒートアイランド現象を抑制する「バイオスキン」の技術を使用していて、周辺環境への配慮も含めた高い環境性能を確保している。



山梨知彦（やまなし・ともひこ）：1960年神奈川県生まれ。1984年東京芸術大学卒業。1986年東京大学都市工科大学院修士課程修了。1986年日建設計入社。現、日建設計執行役員設計部門代表。主要作に「木材会館」、「ホキ美術館」など。オリンピック関連施設の設計にも関わる。2010年より、日本大学大学院建築学専攻非常勤講師。



石原嘉人（いしはら よしと）：1980年京都府生まれ。2004年京都工芸繊維大学造形工学科卒業。2006年同大学院修士課程修了後、日建設計入社。桐朋学園大学音楽学部調布キャンパスを担当。

——バルコニーは、実際に外に出られるものとして使われているのですか。

山梨：残念ながら、今は出て使えないんです。しかし、床までガラスのビルはキレイだけど、怖くて窓の先へ近寄れなかったのが、バルコニーがあることによって安心して近寄れる。このビルの竣工式の1週間前が東日本大震災だったんですね。そのときにこのビルにいた人たちは恐怖心をまったく感じないで、他のビルを見ていました。それはもしかしたら、バルコニーを持っていたからかもしれません。10年、20年経てば、やがてバルコニーを使いたくなって、バルコニーに出てくれるんじゃないかという想いもあります。

また、ここでは厚みを持ったスキンの中に、あえて柱を出したんです。これまでのオフィスはユニバーサルスペースを求めていると言いながら、凸凹で柱だらけなんですね。柱のない、本当にツルリとした一区画で、ブラインドすらその中に入っていない。当たり前のようだけれど、誰もやってなかった。

9.11にも結構ショックを受けました。あのとき飛行機が突っ込んで、超高層ビルから煙に追われた人々が飛び降りてしまった。ダブルスキンは環境にはいいかもしれないけれど、超高層にいるときの気持ち悪さと言うか、直観的に安全性を感じられないところがある。みんなが感じているそんな不安感を、バルコニーを伝えて逃げることで消せるんじゃないかとも考えました。

サイトスペシフィックな点で言えば、コアに入ってエレベータを降りた瞬間に、周りの環境とガラス1枚の透明な関係なのに、周辺のコンテキストと切り離されて、どっちを向いているかわからないことがよくあります。その感覚が非常に気持ち悪い。ソニーは、これだけ巨大でも、オフィスの中で駅の方向を絶対に見失わないんですよ。向いている方向の環境によって四面がまったく違うことで、自分のグローバルなポジショニングが常にかかることは、大型建築における安心感ではないでしょうか。

川島：常に外を感じますよね。

羽鳥：ユニークなオフィスは歴史的に見るとたくさんあります。例えば「新宿NSビル」(1980 | 日建設計)は学会賞を取っていますが、商業施設が上や下に結構入っていて、吹き抜けがあったり、新宿の副都心における夢の未来の世界に対する時代の後押しがあった。ユーザーのためにあったというよりは、いろいろな人を惹き付けるためにつくられたと思うんです。しかし、最近のロジックはユーザー主体です。都市生活者である働く人に対して、どうロジックをつくっていくか。環境やクリエイティビティのために、企業がそういう態度を建築として街に表明しはじめたとも言えると思います。

川島：以前の日建設計のビルでは、設計部と構造部と設備部が一緒にフロアにいたのですが、フロア面積が小さい現在のビルに引っ越してからは、お互いが会わなくなりました。つまりフロアが3倍に広がると出会う確率が3倍増える。これからはメガフロアの時代だと思いました。

山梨：第一世代のオフィスは工場と一緒に、機能主義でした。あらゆる建築がそうだったけれども、オフィスはその権化であり、機能で語られていました。次に、「見える化」という言葉が流行っていますが、吹き抜けを取って、オフィスの全体像を可視化することで、働いていることの一体感を得る。機能一辺倒ではなくて、見えることが大事なんだと言い出したオフィスがありました。今度はアクティビティ、人間のふるまいや行動に対して目を向ける時代になりました。オフィスが、やっと本当の意味で機能ではなくて、人間が働いていることに着目したときに、決してメガフロアは人間離れして行くのではなく、人が出会う場所になる。第一世代が機能主義、第二世代が見える化、第三世代になって、やっと人間のヒューマンベヘビア、活動に対して、オフィスをどうつくろうかという話が顕在化してきたときに、メガフロアの意味がまったく変わったのです。

——次のオフィスとしてはどのようなことが考えられますか。

石原：ソニーをつくったあと、プロトタイプとし

オフィス第三世代は、
人間のふるまいや行動に対して目を向ける時代、
メガフロアは、人が出会う場所になる。

大学生はオフィスで働いたことが、ないわけじゃない。

君らが働いている製図室はオフィスそのものなんだから。

で量産しないのですかと言われることがあります。けど、プロトタイプをつくったというイメージは僕らには、あまりありませんでした。敷地が変わったり、お客さんも変われば、形はドンドン変わっていく。それぞれの個別解だと思います。

山梨：オフィスでも雛形をつくって転用する、大量生産的に建築をつくるのがいいと言われていました。それがパラダイムとして変わって考えています。

わかってきたことは、建築はもともと一品生産で、ていねいにひとつのプログラムや環境やシチュエーションに応えることが大事なんじゃないかということです。そうやって応えると、特注生産になったりするのだけど、それが今、デジタルなデータさえつければ、個別的な形がつけたりするようになりました。コンピュータシミュレーションによって一品生産である建築を事前にバーチャルな世界でつくることで、格段に設計の精度が上がりますしね。

ぼくらにとってITは、大量生産の美学でつくっていた大型建築をあるべき一品生産に戻しつつも、ハイクオリティなものをつくることのできるというものです。ぼくはそれを**マスカスタマイゼーション**と呼んでいます。いかに個別解を正確に正しくつくるか、シミュレーションを通してていねいに探していくことが、大型建築でもできるような時代になったのです。大量生産的なマスプロダクションによる建築から、マスカスタマイゼーション、個別のプログラムと条件を合わせた建築をていねいに作りつつ、経済的な合理性に乗せることを目指していきたい。

——今年度より2年生の設計課題としてオフィスがはじまります。オフィスの専門家として一言お願いします。

山梨：何のために働くか、どう働くか、まず働くことに着目して考えないと、ただの貸しビルになっちゃいますよね。知的生産性で働くのか、工場のように働くのかで、柱一本の建て方から全体の形も違ってきます。働き方に着目して、どのような働き方だから、こうつくるというストーリーが組めると、随分と新しいことができるし、先生との議論も弾むでしょう。考えてみれば、大学の研究室っての

は知的生産のオフィスとしては最高のオフィスなんです。だから、大学生はオフィスで働いたことがないわけじゃない。君らが働いている製図室はオフィスそのものなんだから、働き方をイメージしてつければ、説得力を持った知的生産に溢れる場がつけれるはずです。

羽鳥：日大なんか、まさに高層オフィスで働いているようなものですよ(笑)。

——組織事務所について、学生たちはイメージを持てていないと思います。実際は、どんなところなのでしょう。

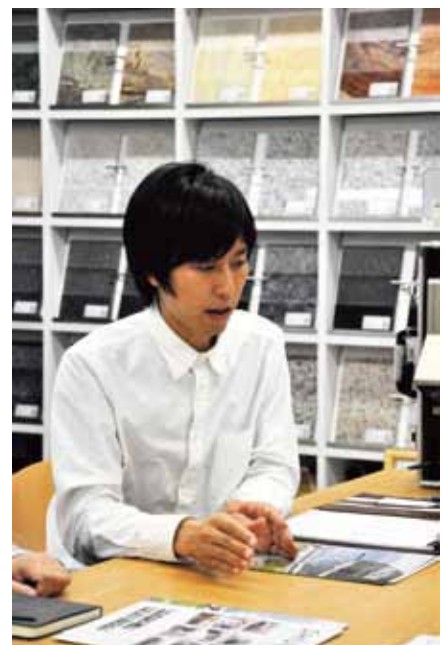
山梨：少なくとも会社の組織としての命令形態にはヒエラルキーはあるけれど、みんながそれぞれの個性を持って、アイデアを出すことにはすごくオープンです。そのほうがひとりの人間が考えるよりおもしろくなりますからね。インターネットによって集合知というものがわかってきていて、知識のまとめ方もわかってきました。組織事務所だからと分けるんじゃないで、チームで設計しているんだとわかってもらえると、しっくりくるんじゃないかな。よく言われるのが、トイレばかり描いている社員がいるという話。そんな組織事務所、絶対あり得ないですよ。そんなことをしたら辞めちゃいますからね(笑)。部下の意見に刺激されて意見を言ったり、部下の意見をまとめていくのが上司の役目です。そのやり方をどうやって貫くか、難しいけれど、おもしろいですね。

日建設計らしさがあるべきだとよく言われます。けど、そんなのは2,500人も社員がいるのにあり得ないわけです。ひとつの箱の中にまったく違う考え方の人がいるのに、同じ会社だからその人と秘密がなく話が聞けることのほうがおもしろい。全く違う質を持ったチームが同じオフィスで会話ができるのは、この時代における最大のメリットじゃないかな。だから、一枚岩じゃなくていい。世の中もクライアントも多様です。だからこそ、そういう多様性のある組織が世の中にも求められていると思います。ひとつのやり方で世界を支配するなんてあり得ないですからね。

(2014年9月17日(水)東京・飯田橋、日建設計本社ビルにて収録)



羽鳥 達也 (はとり・たつや)：1973年群馬県生まれ。1998年武蔵工業大学(現東京都市大学)同大学院修了後、日建設計入社。現在、日建設計設計室主管。小規模オフィス、お笑いのための劇場、ミニシアター、6,000戸の集合住宅、超高層オフィスなどを担当。2014年より、日本大学大学院建築学専攻非常勤講師。



川島 範久 (かわしま・のりひさ)：1982年神奈川県生まれ。2007年東京大学大学院修士課程修了後、日建設計入社。2012年カリフォルニア大学バークレー校客員研究員／LOISOS+UBBELOHDE。2014年日建設計退社、東京工業大学大学院建築学専攻助教、ARTENVARCH共同主宰。

**今流行るものよりも、10年後、20年後、評価されるものを目指して。
最後は、遺跡と勝負をしたい。**

賞の名称：2014年日本建築学会作品選集新人賞

受賞者名：菅原大輔

受賞作品名：森のオフィス

建築用途：オフィス

竣工年：2011年

「日本建築学会作品選集新人賞」は、日本建築学会が編集する作品選集に掲載された40歳未満の若手建築家たちの中から優れた作品が選出されたもの。

今年は8名の建築家が選出され、非常勤講師でO B (理工 2000 年卒)の菅原大輔先生も受賞した。

菅原先生は、ちょっと変わった取り組みをはじめている新しいタイプの建築家だ。

受賞した作品はどんな建築？ 模索している新しい仕事の取り組み方ってどんなこと？

事務所を訪ね話をうかがった。

インタビュアー = 田中元子 /mosaki



菅原大輔(すがわら・だいすけ)：1977 年 東京都生まれ。2000 年 日本大学理工学部建築学科卒業。2003 年 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了。2004 年 シーラカンスアンド・アソシエイツ(日)。2004-05 年 Jakob+Macfarlane (仏)。2006-07 年 Shigeru Ban Architect Europe (仏)。2008 年 SUGAWARADAISUKE 設立。2013 年より日本大学理工学部建築学科非常勤講師。

——若いアトリエ系の建築家で、シャツとスーツをきちんと着てる人って珍しい(笑)。

菅原：オラオラ系に見えるけど、これが社会的には普通の格好ですよ(笑)。

——建築家は本来、いろんな立場の人たちに出て、協働しなくちゃいけない職業なわけだから、ファッションもニュートラルにしくちゃいけない。そういう意味では、真っ当だと思います。

あっ、いきなり脱線して、ごめんなさい(笑)。この度は受賞おめでとうございます。まず受賞した作品について少し教えてください。

菅原：受賞したのは「森のオフィス」という建築です。三重県の松坂にある会社で、塾や飲食、ブライダルなどを全国展開している会社の本社屋。日本の中心都市で事業展開しながらも、各地にないいい機能、例えば経理やウェブ制作などの部署を、創業地にバックオフィスとしてつくったものです。

ここではまず、外観のない建築を目指しました。逆に言うと周辺の街並みや木々を連続させた内観しかない空間です。写真を見てもわかるように敷

地全体に閉じなくてはいけない機能を持った小屋群を配置しながら、その合間にある季節感を持った庭群を一体的に計画して、連続した大空間をつくっています。どの場所においても、その場所特有の変化があるんです。刻々と変化する自然の移ろいを身体で感じながら、最適な居場所を動物的に選択できる環境をつくりたかった。建物だけでなく庭や家具など、異なる要素を一体的に捉えて、設計をしました。結果として、本当にいろんな居場所が生まれています。

——このオフィスはフリーアドレスなのですか。

菅原：そのように提案してつくっているのですが、今はまだそうなっていません。この会社は一代で築き上げた会社で、まだまだ成長していくので、これからどれだけスタッフが増えていくかわからない。だからこそ余裕を持たせたつくりにもしています。常駐スタッフだけではなく、全国から臨時で人が集まることもあるので、そういうときはフリーアドレスのように使う人もいるみたいで。だから、建築が本当の力を発揮していくのは、竣工後のこれからなんですよ。

この建物だけではなく、僕の建築に共通する



のは竣工当時よりは、5年後くらいから良くなっていきます。

——本来建築は、そういうところを目指すべきですよ。学会賞もその他の賞もほとんどすべてが、いわゆる竣工時の状態について与えられているのだけど、5年後、10年後の賞もあるべきですよ。山崎先生がよくおっしゃられるけど、竣工当時なんて植物もひよろひよろなわけで。

菅原：本当にそういう賞もほしいですよ。竣工したときってのは、成熟した居心地とか環境、自然については語るができなくて、形態論や形式論に陥りがちです。それって居場所としての正しさというよりは論理的な正しさなんですよ。それだけが評価されてしまうってのは、まずいのかも。

——最近はどうなプロジェクトが多いのですか。

菅原：最近住宅はもちろん、オフィスや飲食店など、いろんなプロジェクトに取り組んでいます。例えば「TRATTORIA KAWANABE」というレストランでは、空間デザインはもちろんのこと、家具選びからお店のロゴ、メニューの内容からその価格までに関わっています。そこまでしていると、自分は何屋か？とも思うけど、それらを建築家としてやっています。

——空間からロゴ、メニューまでトータルに関わる、つまりブランドイメージ全体を創ってるってことですよ。そもそも学生の頃から、建築家としての仕事がそのように拡張すると思っていた。

菅原：学部的时候は意匠系の高宮ゼミと計画系の若色研究室に所属していました。もちろんそんなことは思っていなかったですよ。

学部を卒業して大学院は、建築を言葉でも語りつつ、作品もつくっている建築家の元に進学したいと、大学院は早稲田大学の古谷誠章さんの研究室へ行きました。ちょうど古谷さんは「せんだいメディアテーク」(2000)のコンペ2等案が話題になっていたところで、古谷研の卒業生はアトリエ系や組織などの建築設計だけでなく、電通や博報堂といった広告代理店に多くの人が就職していました。そのような環境の中で大学院生時代は広告系の会社でバイトをしていました。社会を変える面白味を感じつつも、すごいスピードで消費されていく違和感も感じて、これは合わないあと。そこで卒業後は、きちんとモノに向き合う建築に取り組みたいと、C+A/tokyo や パリの Jakob+Macfarlane、Shigeru Ban Architects Europe に勤めました。

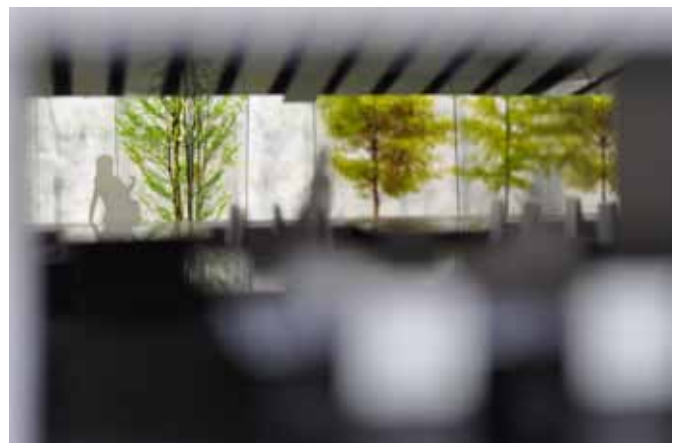
ところがモノとしての建築をつくることのおもしろさを実感する中で、仕事の領域をもう少し大きなクリエイティブという枠組まで広げることに

も興味が湧いていきました。独立してからは、建築設計をやる傍ら、それ以外の仕事も自然と相談を受けるようになって。例えば、内装を請け負ったお客さんが、ホームページも変えようと思ってる、と相談が来たり。そうかと思えば、社員を元気にしたいんだよね！みたいな相談もあったりして、そういう依頼を受けることが多くなっていて、知らない間に、自分の仕事が広がっていったんです。

——クライアントが抱えている問題って、モノとしての建築だけで解決できるものではないから、本当は菅原さんのように、モノとコトの中間で、できることをできるだけサポートしてあげる、その中間的なポジションが新しい建築家のひとつの可能性だと思います。

菅原：決して、僕が何でもやりますよ！とアピールしてこうなったわけではないのです。あくまでそれぞれのプロジェクトの中で、いろいろとクリエイティブしていく中で、頼まれたことに応えて、ときには他の分野の人と協働しながら取り組んできた。それがまた次のクライアントを呼んでという連鎖の上に今があります。一緒に協働する人にも、とても恵まれてきています。グラフィックデザイナー然り、いろんな分野の専門家とコネクションを持ち協働できるからこそ、クオリティを保ちながら、建築だけではないさまざまなことにも応えることができる。その中で、建築で学んだ状況を

とにかく機能的なことは100%実現しながら、
その上で建築家だからこそできる
仕掛けや仕組みをつくって、
クライアントに良かったと思わせたいですね。





いつか僕の設計事務所も、
いろんな能力を持ったディレクター集団になればいい。
そうすれば、変わりゆく建築家の職能を示しながら、
仕事の質をもっともっと上げていける。

細やかに観察しつつ全体を俯瞰し、積み重ねるような時間軸を考えることは、とても有効に力を発揮できていると思います。とにかく機能的なことは100%実現しながら、その上で建築家だからこそのできる仕掛けや仕組みをつくって、クライアントに良かったと思わせたいですね。

——そうですね。それができないともはや建築家に設計料を支払う意味が見い出せない時代です。インテリアデザイナーはもちろんのこと、今や雑貨屋さんのレベルでも相当にセンスを上げていて、一般の人たちは参照している時代ですから。だからこそ、地に足を付けて一般の人達と対話できるスキルは大事になるし、それこそが建築とクライアントを生き生きさせる。

菅原：最近は建築家にもいろんなタイプがありますよね。俯瞰した形で建築の社会的、文化的な正しさみたいなものを語りながら、社会の要求に応えるべきだという人は昔からいますが、一方でひとりのお客さんに深く深く入り込んでいて、出てくる問題の一つひとつ見つけて関わっていけば、最終的に社会の要求に応えることにもなる。最近良くそう思うんです。個人を通して見ていけば、どこかで反転して社会的な広い意味が見えてくるというか。その方があたたかいものがつくれるとも思います。だから、クオリティの八方美人を目指したいですね。

——これまでは、社会を見ているという大文字の建築家や、あるいは個人を見ているという地に足の付いた住宅作家という風に切り分けられすぎていたかもしれない。けど、社会は個人の集団で、個人の集団は社会と考えると、建築家のあり方はどちらでもない新しいあり方がありますよね、きっと。

菅原：そう。どちらかではなく、それをつなげられる別の方法があると思います。

——スタッフは今2人だそうですが、他分野の専門家とのネットワークは、新しいプロジェクトの進め方という上ではポイントになってくるんでしょうね。

菅原：そうですね。ヨーロッパで体験したことの影響が大きいのですが、あそこでは本当にいろんな分野の人たちが、常に協働していました。そういうネットワークができれば、規模感によらず柔軟に動くことができます。いずれ僕の事務所も各々がいろんな能力を持ったディレクター集団になればとも思うんです。今、プロジェクトは10個ほど動いていますが、そういう中でも変わりゆく建築家の職能を示しながら、仕事の質をもっともっと上げていくことができると思います。

——モノかコトか、建築空間かそれ以外か、という二項対立ではなく、そのバランスが大事になりますよね。ただバランスを取りすぎていると、プロジェクトとしてのインパクトが薄れてしまいます。

菅原：そうですね。僕はどちらかというところがあるので、その中で、今回の「森のオフィス」がよく学会の賞をもらえたなど。ちょっとこれまでの建築家とは異なる働き方をしていることもあって、学会の賞なんて無縁だと思っていましたから。だから、率直にやってきたことが認められた喜びと同時に、不思議な感覚もあったりして。とにかく今後もがんばらなくてはけません。

——最後に、ひとことで、これからは、どんな建築をつくっていきたいと考えていますか。

菅原：今流行るものをつくるより、10年後、20年後にきちんと評価されるもの、お客様が満足するものをつくっていききたい。最後は遺跡と勝負したいですからね。

駿

(2014年9月19日(金) 東京・杉並、SUGAWARA-DAISUKE にて収録)

小笠舞穂さん(M1/ 佐藤慎也研究室)の卒業設計「在り触れる美術館」は、
昨年の卒業設計で桜建賞を受賞し、その後も、さまざまな賞を受賞していきました。

さまざまな建築家に評価された経験や、卒業設計への取り組み方、
また研究室での活動について、リアルな声を届ける 60 分インタビュー！

インタビュアー＝大西正紀 /mosaki



—— 卒業設計は、どんな提案なのですか。

小笠：タイトルは「在り触れる美術館」で、中野駅の北口に移動式美術館システムを提案したものです。敷地は、今は自転車置き場になっているのですが、再開発がかかっていて、10年後にはペDESTリアンデッキとバスターミナルが完成する予定です。当時の私の住まいが隣駅の高円寺で、あまり良くない計画だと思っていたいました。駅前にはたくさん木があるのですが、私の計画では、すべての木を残して、地形を掘り込みながら、その中に道を通して小さな展示空間を配置して、ロータリーに入るバスはコミュニティバスくらいのものにして、トラックの荷台に展示室を載せたものがまちを巡回していくシステムまでを提案しています。

—— まちを巡回する展示空間のトラックは、中野区内のいろんな場所へ行くってことですか。

小笠：そうです。23区のほとんどには美術館があ

るのですが、中野区には実は美術館がひとつもありません。ホールのような他の文化施設はあるのですが、飽和状態で。そういったこともあって、このようなシステムを提案することで、より人々が循環するというか。ハードとしての建物をリノベーションしなくても、ソフトをリノベーションしてテコ入れできるものを考えました。

—— どうして駅前のこの場所にしたのですか。

小笠：駅前でやるべきだったのは、当初から考えていました。このプロジェクトは日常の真ん中につくるべきだと考えていたので、郊外でも遠い公園でも自然の中でもなかったんです。東京の人の日常は駅前だ！って。

—— 佐藤慎也研究室では、美術やアートについてたくさん触れる機会があると思いますが、もともとそのようなことに興味はあったのですか。

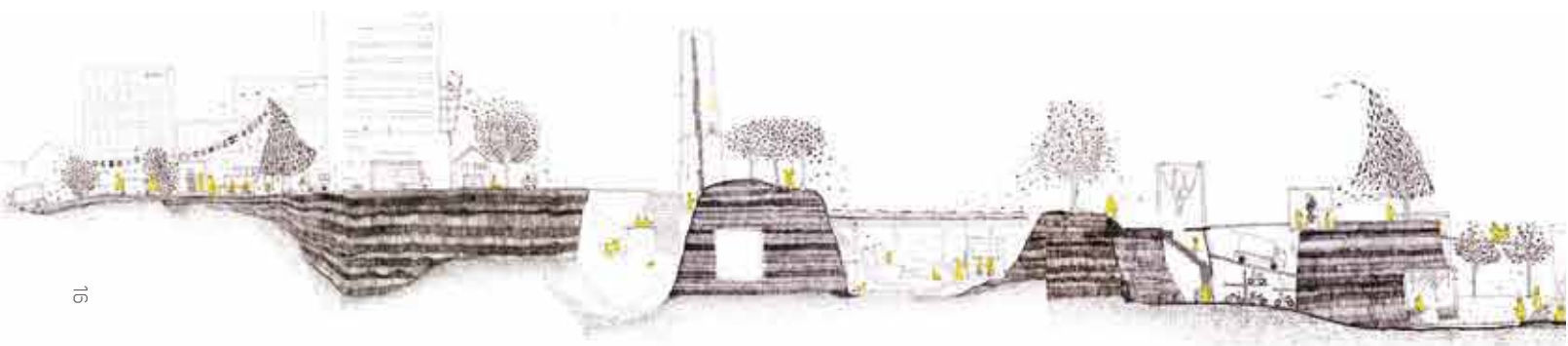
小笠：美術やアートについては、明確な興味はなかったです。ゼミナールも佐藤慎也研ではなかったんですよ。ただ、漠然と設計のど真ん中ではないところで勉強すべきだと思っていたところ、研究室の面接日に、たまたま扉が開いていた佐藤慎也研を訪ねて。そこで先生と話したことがきっかけでした。この研究室は、1年間ですごい数の美術館やアートプロジェクトに行くんです。佐藤慎也研に入る前は、この研究室は建築をやっていないって印象だったのですが、入ってみたら今では“これこそが建築だ！”って思えるようになったんです(笑)。

—— 確かに小笠さんのこの作品を見ても、単にアートや美術について取り上げているというよりも、そこを起点に、きちんと社会や地域のことについて捉え、考え、そして建築も含めたシステムを提案していますもんね。それが今おっしゃった“これこそが建築だ！”ってことですよ。

学内外での評価も大きかったと聞きました。

小笠：まず、私の作品が学内の先生たちに良い評価をいただけるなんて、思ってもいませんでした。結果、桜建賞をいただいて。それで「せんだい日本一決定戦 2014」にチャレンジしたのですが、予選すら通れなくて。そうしたら、学内で次点だった佐藤達弥くんが、10選に選ばれたんですよ。それは悔しかったです。たくさん後輩たちに手伝ってもらったこともありまして。だから、そのあとの「赤レンガ卒業設計展 2014」でがんばって、そこで彼と一緒に10選に選ばれました。でもさらに作品をもっとブラッシュアップさせていって、それで「JIA 全国学生卒業設計コンクール」の東京大会では、憧れの西沢立衛さんが推してくださって、2位の銀賞をいただけました。さらに次の「レモン展 2014」では、レモン賞と審査委員長の坂本一成賞をいただいて。それは、本当にうれしかったです。

—— いろんな建築家の方々に作品を見てもらうと、いろんなコメントをいただけたと思います。どの方が一番印象的でしたか。



小笠：とにかくどの建築家の方も、やさしいなと感じました。本当に丁寧に真剣に見てくださって意見をくださるので。その中でも坂本一成さんが一番印象的でした。「レモン展 2014」では、ひとりに与えられる説明の時間がわずか 2 分で、じっと審査委員が来るのを自分のボードの前で待っているのです。

坂本先生が私の前に来たときに「これは何ですか？」と聞かれて、「美術館です」と答えたら、「これは美術館に見えませんか」と言っていて、たった 20 秒で坂本先生は行ってしまったんです！ ああ、これはもう終わりだって……。そしたら、1 時間後に戻ってきてくださって「これはいいと思うんですよ！ 他の作品の学生たちは、良い子良い子してる中、あなたのは違いますね。こんな建たないものをつくってるのがいい！」って(笑)。「何から考えるのですか？」って聞かれたので、4 枚の A1 で展示していた断面のドローイング(下図)を指して、ドローイングから描きましたって言うのと、「思ったことを先ず描いてみることは大事ですよ。さらにそれを人様にきちんと見せることが大事です」って。とにかくいろんな建築家の方に評価してもらうことは、自分の作品について自分では考えてもいないことを意味づけられることで、それがとても刺激的でした。

——それは、ステキなやりとりでしたね。このドローイング、これは初期からそれほど変わっていないのですか。

小笠：そうですね。というか、設計は年明けから取りかかって、3 週間で仕上げました。だから、それまではほとんど何も描いていなかったんです。そもそも美術館をやるぞって辿りつくまでが長くて。

——卒業設計の前段階の卒業研究は、どんなことをやっていったのですか。

小笠：「神」についてやってたんです。

——神！？！？ ゴッドの神ですか！？！？

小笠：そうです。もともとアイドル、特に AKB が好きで。アイドルの AKB なんかを神として扱う人たちがいますよね。その神としての AKB が日常に降りてくるとき、例えばアイドルの握手会なんかを「神に会える」なんて表現したりします。

佐藤慎也研に入って、たくさんの美術館やアートプロジェクトを体験する中で、これは同じところがあるって、あるとき気付いたんです。ハードとしての美術館に展示されている作品やアーティストって、いわば神的存在なんです。それが、日常のまちなかに降りてきて展開しているのがアートプロジェクトのようなもの。まさに AKB 的な、「神が降りてくる」と同じだ！って。

研究室に入って、いろいろ体験しながら、そこに辿りつくまでに 8 ヶ月かかったってことですね。今、気付きました(笑)。その上で、アートや美術におけるアーティストとお客さんとの関係について研究していきました。そして、明確な関係を持っているハードとしての美術館や、曖昧な関係を持つまちに展開するアートプロジェクトのようなものがあるのであれば、その中間のものこそが今必要だと、卒業設計に展開していったわけです。

——おもしろいね～！！ アイドルにはもともと興味があったのですか？

小笠：追っかけとかはしてなくて。AKB なんかも人としてではなくて、その存在そのものが好きだったんです。メジャーなのにサブカルで、アホっぽいところもあって、それがおもしろいというか。

——つまり小笠さんの中に、アイドルと神が並列に存在していて、そこで研究室の体験を通してアートを重ねていきながら、自分自身で解釈していったんですね。

結果、建築もアートも好きになりましたか。

小笠：好きになりました。昨日もゼミナールで 3 年生に話したのですが、この研究室は、カリキュラ

ムの授業では、絶対にやらないことをやる研究室です。アートプロジェクト論なんて授業はないですからね。ジャンルが離れてそうな、一見建築とは関係ないようなことをやっていて、そこから建築に結びつけて考えるからこそ、見えてくることがあるんです。最終的には、何でも建築として見られるようになるっていうか。

——本当に素晴らしいことだと思います！ 私もそういう気付きを持った人が、建築学科からもっともっと育つべきだと思っていて。何を見ても……。

(2 人同時に)：建築だって！！(爆笑)

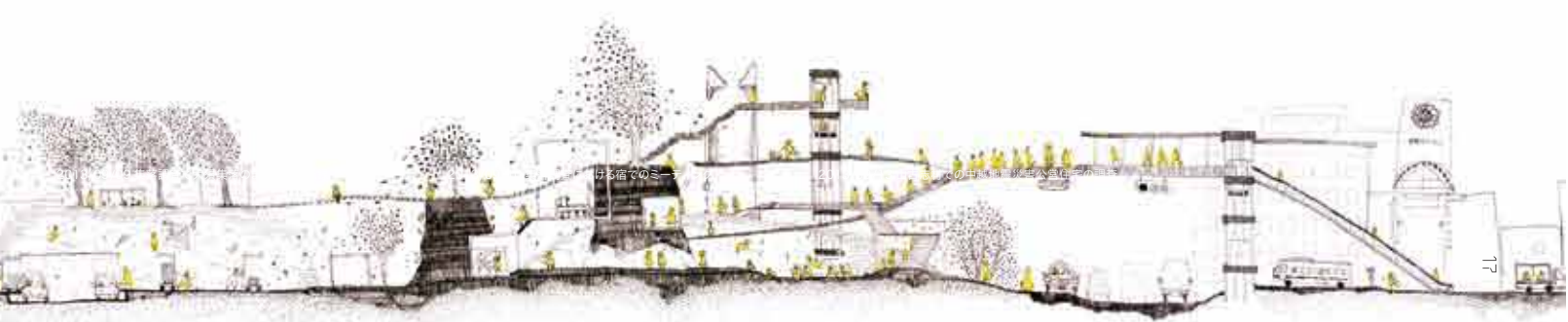
小笠：本当にそうだと思います。いろんなことを見たり体験したりしたときに、建築とつながって理解できたときに、とても興奮します。恐ろしい？ いやっ、いい研究室に入れたなって思っています。

——大学院に進学して、卒業後のことは、どんなことを考えていますか。建築には関わりたい？

小笠：私は広島出身なんですけど、とにかく東京での生活が楽しいので、まずは東京に暮らせる職業に就きたいです。建築に関わるかということについては、すべてが建築ですから。研究室のまわりには卒業生も含めて、アートプロジェクトの運営に関わっている人が多いのですが、そういう人たちがされていることも、ある種の設計みたいなものです。意匠設計ではないけど、いろんなものごとを複合的に重ねて存在している状態を整理していく。それは私にとって明らかに設計です。そういうことが好きだから、そういう経験をもっとしていきたい。明確な将来像は、まだわかりません。そういう新しい職業があるといいんですけどね。あつ、これは自分がつくらないといけないのかもしれないね。

図 4

(2014 年 9 月 26 日(金)、佐藤慎也研究室にて収録)



段ボール・ラブチェアー

2人1組でつくる、2人掛けのチェアの制作

text= 町田昂弘 設計事務

夏季集中「デザインワークショップII」を8月4日から9日まで実施した。デザインワークショップは、限られた時間の中でアイデアを集中的にまとめることを目的とした科目であり、毎年異なる課題が出題されている。今年の参加者は合計40人。去年と異なり、今年は2人1組のペアによる制作とし、総勢20組での取り組みとなった。非常勤講師として安藤勢津子、井手孝太郎、高橋真奈美の各先生を迎え、科目担当の横河健先生を含めた4名による共同指導で進められた。

課題は「段ボール・ラブチェアー」。実際に使用できる椅子の制作である。制作条件は、①段ボールで制作すること、②2人で座る椅子であること、の2つである。シンプルなお条件のもと「ラブチェアーとは何か?」を思考することがテーマとして掲げられた。例えば、2人で愛を育むもの、「物」としての「家具」、「環具」としての「空間」など、自由な課題の捉え方と提案が求められた。

授業は、初回のアイデアスケッチを元に、即席のペアを組むところからはじまった。多くのペアが、はじめて共同で設計をするという新鮮な空気の中、課題前半は、共同案のスタディと1/10の模型によるエスキースを実施。後半は、模型から実寸でのスタディに移った。座面や材料の接合部の強度不足、可動部の機構の不具合など、模型では見えてこなかった課題を前に試行錯誤を重ねた。

5日間の健闘の結果、全ペアによる20作品すべてが完成した。材料特性を活用した作品から、可動する仕組みを取り入れた作品、2人の身体的・心理的距離感を演出する作品まで、想像を喚起させる多角的なデザインが提案された。講評会は、実際に「座る」体験を通して大いに盛り上がりを見せ、最優秀賞1点「今村文悟・竹田実紅ペア」、優秀賞1点「安藤恵太・猪野恵梨菜ペア」、佳作として8点が選ばれた。これらの10作品は、NU建築週間において1号館5階CSTギャラリーに展示された。これからも多くの優秀作品を発表してゆけたらと思う。



今村文悟・竹田実紅



安藤恵太・猪野恵梨菜



稲葉来美・倉谷星美



風間証聖・永田琴乃



河部卓也・洞口由宇



下田麻穂・渡辺芳恵



添田魁人・高野遼太



高橋香子・浅川紳太郎



李智善・太田みづき



古賀愛乃・福田航大



放置された屋敷林の竹を使い、 食の空間で使う「もの」づくり

text= 山崎誠子 短大准教授

短 大建築・生活デザイン学科、夏季恒例「ものづくりワークショップ」は今年で7年目を迎えます。担当教員が私に変わったことと、3年前から学科が建設学科から建築・生活デザイン学科に変更されたことで、建築に限らないデザインの分野を目指す学生もいることから、内容を見直しました。キャンパスを飛び出し、自然のフィールドから学び、手を動かし道具を操ることの中から、ものをつくりだす喜び、醍醐味を体験するという主旨は変わらず、つくる対象と作業場所を変更しました。つくるものは、「食の空間にあるもの」とし、食べるために使うカトラリーから、食材を切る道具、できた料理を載せるお皿やテーブル、椅子、空間を飾る花器など、小さなものから大きなものまで自分た

ちだけでつくることができる、つくりたいものとししました。材料は例年と同じく竹林の竹ですが、今回は船橋地域との関係性を持たせようと、船橋キャンパス周辺で手に入れるところはないかと探したところ、市川市役所さんの紹介で、松戸市秋山にある「秋山の森」にめぐり合うことができました。屋敷跡地で「松戸里やま応援団（以下応援団と略）」の方が主に管理をしています。応援団の方が物置小屋やたきぎ場所、管理車両の駐車スペースなどを整備されているため、学生でも利用しやすい環境が整っています。

参加者は1年生の12名、男子2名、女子10名と、過去の男女比率とはまったく逆でした。ワークショップは5日間行われ、1日目はデザインの検討で船橋校舎の演習室での作業、2日

目は「秋山の森」で応援団の方に指導を受けながら竹の伐採、運搬。2～3日目が船橋校舎14号館下のテラスで工作、5日目は完成品の報告書作成としました。1日目のデザインを決めたときに、小さなものをつくりたいグループと大きなものに挑戦したいグループに分け、2日目の森の現場では、放置された屋敷林の話から里山の大事さを応援団の方に説明していただき、デザインに必要な竹を3人1組になって応援団の方に鋸の持ち方、竹の切れ目の入れ方を聞き、ヘルメットをかぶって、蚊と戦いながら長さ3～5mぐらいのものを伐採し、星先生が運転するトラックに積み込みました。皆、最初はおぼつかない手つきでしたが、30分もすると様になり、楽しいと感じていました。



屋敷林の説明を受ける



指導を受けて竹を伐採しているところ



応援団の方々を記念撮影

3日目は酷暑の中でしたが、思いのほか風の通る14号館下のテラスで鋸、なた、ナイフ、電動ドリルなどを使って工作します。予想以上に竹が重かったり、太かったり、切れ目を入れると割れたり、デザインを形にする苦労を重ね、4日目の夕方に完成しました。

14号館下で作業している間は、通りすぎる他学科の学生や先生が多いに興味を持ってくださり、飲み物の差し入れまでしてくださる方もいらっしゃいました。各自が作成した報告書には竹を伐採するときは大変だったとか、工作が難しかったとか書かれていましたが、完成したもので実際に食事会ができたことはとても楽しかったということが一番多く書かれていました。自分でつくったものが使える喜びは普段の授業では体験できないことです。作品は9月いっぱい船橋キャンパスの中央庭園に展示したことで「流しそうめんだけかと思っていたんですが、かなりしっかりしたものをつくったんですね」と言われ、学校内で作業したことの成果を感じました。



14号館下テラスでの作業風景



カウンター式のテーブルと長ベンチ、コップとそれを立たせるスタンド、お皿、竹の箸とそのケース、花器、風鈴、そしてお約束の流しそうめん。参加者全員が必ず何かをつくることができました。



■受賞

・吉沢 彬成くん、中田有紀さん (M2 / 今村研) による作品「小さな住処と大きな広がりの家」が「第1回 POLUS- ボラス - 学生・建築デザインコンペティション」(応募総数 458 件) で上位 5 選に入賞した。(写真 1)

・渡辺 裕貴くん (M2 / 今村研)、近藤正和くん (M2 / 佐藤光彦研)、西明慶悟くん (M2 / 山崎研)、平野雄一郎くん (M2 / 佐藤慎也研) の 4 名の作品が、「キルコス国際建築設計コンペティション 2013」(応募総数 339 件) で、椎名英三賞 佳作に入選した。(写真 2)

■出版

・星和磨短大助教が執筆者として参加した "Computational Simulation in Architectural and Environmental Acoustics" (Springer) が刊行された。本書は『音環境の数値シミュレーションー波動音響解析の技法と応用ー』(日本建築学会) の英訳版である。星短大助教は、薬局や銀行などのカウンターに設置されているパーティションの遮蔽効果について、finite-difference time-domain 法を用いて解析した事例を紹介している。(写真 3)

・岡田章教授、宮里直也准教授が執筆した『くわしすぎる構造力学演習 I M・Q・N 図編』(彰国社) が刊行された。本書は問題を解くことを通じて、構造力学の楽しさを味わいながら自然と理論が身に付くことを目的としており、反力から片持梁や単純梁の断面力までを扱う。(写真 4)

■論文掲載

・井上勝夫教授、阿部今日子氏 (H21 年度博士後期課程修了: 井上研) 連名の「集合住宅の居住者反応からみた重量床衝撃音遮断性能の生活実感による表現方法の検討」と題する原著論文が日本建築学会環境系論文集、第 78 号 (2014.7) に掲載された。

■イベント

・空間構造デザイン研究室(岡田・宮里研究室)は、「TRANS ARTS TOKYO 2014ー神田リビング・パーク」において、当研究室が開発・製作した「バイオストラクチャー・虹のシザーズ」を設置・展示している。バイオストラクチャーはハサミの原理を用いて、収納・運搬・展開が容易な構造となっており、過去には愛地球博(愛知万博)や B-1 グランプリなどでも建設された。設営は 8 月下旬の小雨がばらつく中、当

研究室の 4 年生と大学院生の手により 5 時間ほどで行われた。

「TRANS ARTS TOKYO 2014」はアートを媒介にして人・文化が出逢い、街のダイナミックな変化を体感しながら東京の未来を描き、提案するプロジェクト。今年は家族がリビングで過ごす時間のように、人々が集まり対話を生み、多様な価値観を交換することができる場をテーマとして神田エリアの会場に多様なコンテンツが集結する。

会期は 2014 年 9 月 20 日(土)～11 月 3 日(月・

祝)、会場は旧東京電機大学跡地など。

<http://www.kanda-tat.com/>



毎月開催、在学生も卒業生も、誰でも参加できる レクチャーシリーズ「オウケンカフェ」2014 年度はあと 3 回！

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「日大桜門建築会」（通称：桜建会）が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」。2 年目も、さまざまな分野のバラエティ豊かなゲストを迎え、（基本的に）毎月最終水曜日の夜に開催しています。現役学生はもちろん、最近は卒業生などの参加も増えてきました。会のあとに行われる懇親会まで、学生の皆さんにも参加いただき、毎回、盛り上がりを見せています。大学の授業だけで伝えられない最前線で活躍するゲストの話は、きっと皆さんの就職や将来のことに役に立つはず。建築のどの分野の方でも楽しめる内容です。ぜひ、ご参加ください！

（詳細は <https://ja-jp.facebook.com/okenkai> まで）

オウケンカフェレポート

vol.13 / 2014.07.23 WED.

ゲスト：大島芳彦（建築家／ブルースタジオ）

| 中谷遼（2 年／建築学科）

商品としてつくられた建物の限界を感じたレクチャーだった。不動産屋にとって良い建物の評価基準は、新しさ、駅からの近さ、日当たり、くらいしかなく、選択肢が少ないとおっしゃった大島さん。その建物の評価基準をオーディオのつまみにたとえていた。大島さんは、隠されたつまみを見えるようにして、建物を使う人にもっとも合わせたチューニングを施すことで魅力的な建物をつくっていた。金融商品としてつくられた建物は何処でも、だれでも、いつでも使うことができる。だから古くなったら、新しく似ている場所に行けばいい。それに対して大島さんは「あなたでなければ、ここでなければ、今でなければ」という理念を持って建物と関わっていた。それが建物に個性



のようなものを生み、建物を楽しむ人が集まって、古くなったからといって切り捨てられない魅力を生むのだろう。建物の価値を建物だけでつくり出すのではなく、周囲の環境、人、時間を利用してつくり出すこと、大島さんは「俯瞰する」という言葉で表していたが、その視点を意識することが大切なのだろう。

オウケンカフェレポート

vol.14 / 2014.09.24 WED.

ゲスト：北澤潤（現代美術家／北澤潤八雲事務所）

| 橋本和弘（4 年／建築学科）

今回のオウケンカフェは、現代美術家の北澤潤さんのレクチャーであった。北澤さんは、限界芸術（非専門的芸術家が作り、非専門的享受者が享受する関係にあるもの）のキッカケをつくりだす芸術家である。その中で、リビングルームとマイタウンマーケット、サンセルフホテルの 3 つのプロジェクトについてレクチャーをいただいた。どのプロジェクトも、日常の中にどうやって非日常をつくりだすことができるのかというプロジェクトである。その中で興味深かったものは、あるコミュニティに入っていき、さまざまなことが起こり、地域のあり方を変化させていくということである。しかし、それは単に地域のあり方を変化させて



いるだけではなく、人間が変化しているのである。その場所は、ときに空き店舗であり、仮設住宅の道であり、団地の空き室である。そこを利用し、住民が主体性を持ち、非日常の体験を行うことで人間が変わり、地域コミュニティを豊かにしているのが魅力的であった。私は、このレクチャーで非日常のコミュニティがこんなにも素晴らしく築けるとすれば、日常の中につくる建築は「どのような関係を生むことができるのだろうか」と考えさせられた。さらに、非日常の芸術を通し、日常の建築を再考させられるキッカケとなったと私は感じている。

オウケンカフェ 2014 年（終了分）

#10 / 2014 年 4 月 30 日（水）

坂下加代子（建築家／中央アーキ）

[建築設計] [デザイン]

#11 / 2014 年 6 月 4 日（水）

中川純（建築家／レビ設計室）

[建築設計] [デザイン] [環境工学]

#12 / 2014 年 6 月 25 日（水）

いしまるあきこ（きつかけ屋／一級建築士）

[建築設計] [リノベーション] [企画]

#13 / 2014 年 7 月 23 日（水）

大島芳彦（建築家／ブルースタジオ）

[リノベーション] [建築設計] [企画]

#14 / 2014 年 9 月 24 日（水）

北澤潤（現代美術家／北澤潤八雲事務所）

[アート] [地域社会] [コミュニティ]

#15 / 2014 年 10 月 29 日（水）

坪倉正治（医師／東京大学医科学研究所研究員／

南相馬市立総合病院非常勤医）

[医療] [被災地] [地域社会]

オウケンカフェ 2014（今後の予定）

#16 / 2014 年 11 月 26 日（水）

アサダワタル（日常編集家／事編 kotoami）

[アート] [地域社会] [場づくり] [住宅] [コミュニティ]

#17 / 2014 年 12 月 17 日（水）

齋藤桂太（アーティスト／渋谷ハウス）

[アート] [コミュニティ] [ソーシャル] [政治]

#18 / 2015 年 1 月 28 日（水）

田中浩也（慶應義塾大学環境情報学部／FabLab）

[ものづくり] [コミュニティ] [地域社会]

* 毎回 19 時スタート。場所は、駿河台キャンパス 5 号館 5 階スライド室 1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は 1,000 円（当日に入会すれば無料）。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

[連載]私と建築 vol.77

スカイハウスとの出会いから

text=大川三雄 教授

1969年に入学した当時のキャンパスには、学園闘争のあとの雑然とした雰囲気が漂っていました。同級生の数も多く、建築を学ぶ上で決して魅力的な環境ではありませんでした。そんな時、先輩から誘われて建築デザイン研究会というサークルの主催する見学会に参加しました。丹下健三の『東京カテドラル』と菊竹清訓の自邸『スカイハウス』のふたつを訪ねる見学会でした。東京カテドラルの内部空間に圧倒され、建築空間の持つ力に胸がドキドキするような体験をしたことを覚えています。『東京カテドラル』が建築の魅力を実際に体験した最初の建築ですが、さらに『スカイハウス』との出会いは、私にとって決定的なものとなりました。

先輩たちが事前にアポをとられていたこともあり、菊竹先生ご自身による丁寧な解説付きで見学することができました。三世代と一緒に暮らす大家族の中で育った二十歳の青年にとって、およそ10メートル四方の矩形の箱が、ピロティによって地上高く持ち上げられた姿は、信じられないような光景でした。内部は居間と寝室と食堂が一体となったワンルームで、外周部にキッチンユニットとバスユニットが置かれているだけの空間です。そこには夫婦ふたりだけの生活が想定されていました。一番気になった子供室は、ピロティ部分にカプセルとして吊り下げられるという話に、三世代同居の経験しなかった私は、ただただ唖然としたことを覚えています。

菊竹先生のお話は、夫婦とは何か、家族とは何か、という問いかけに始まり、近代家族のための住宅像を読み解いてゆくような内容で、生活の変化をメタボリズム(新陳代謝)という考え方に即して力説されていました。どこまで理解できたのかは判りませんが、目の前の住宅が、その美しさだけでなく、背後に“思想”が込められているということに感動を覚えました。建築の奥深さを見せつけられたような体験でした。早速、購入した『代謝建築論 一か・かた・かたち一』(菊竹清訓、彰国社)は、私が初めて買った建築本となりました。建築を学ぶための生活はこのことをキッカケに始まりました。

翌年、大阪万国博覧会が開催され、夏休みを利用して友人たちと出かけました。万博の方は程々に足をのびし島根県にある一連の菊竹作品を巡ることにしました。大胆なプログラムと形態、それを支える斬新な技術に裏付けられた作品群に圧倒されました。どうしても『都城市民会館』が見たくなり、友人らと別れ、ひとりで九州一周をまわることにしました。すでに財布の中味が乏しくなっていましたので、何泊かは駅の待合室で寝たこともあります。長崎駅では追い出されましたが、都城の駅長室でいただいた温かいお茶の味は忘れることができません。

一週間足らずの旅でしたが、私にとっては生涯を決する“グランドツアー”となった旅でした。東京に戻ってからは、建築関係の雑誌や本を手にする機会も増え、建築との距離が急激に近づいたような気がします。大学院の修了間際まで設計希望でしたが、メタボリズムに次いで建築界の注目を集め始めた磯崎新さんの作品や数々の論考、卒業研究の頃にであった長谷川堯さんの著作との出会いなどによって、いつしか建築史の魅力にとりつかれるようになりました。

駿



「スカイハウス」は、1958年竣工した建築家・菊竹清訓(1928-2011)の自邸。1辺10mの正方形の居住空間を、各辺の中央に位置する4本の鉄筋コンクリートの壁柱が、地上から5mの空中に持ち上げた構造。居住空間に仕切り壁はなく、その四周は廊下となっており、キッチンや浴室、収納などが交換可能となるように取り付けられていた。居住階の下部は当初はピロティとされ、家族構成の変化に応じて、居住階からカプセルを吊り下げる形で増築が可能になっており、実際、この方式で子供部屋の増築が行われていった。まさに菊竹が唱えたメタボリズムを体現したもの。上・中:竣工当時の「スカイハウス」。下:現在の「スカイハウス」。



大川三雄(おおかわ・みつお):建築史家。専攻は日本近代建築史。1950年群馬県生まれ。群馬県立太田高等学校卒業。1973年日本大学理工学部建築学科卒業。1975年日本大学大学院理工学研究科博士課程前期建築学専攻修了。1975年～日本大学理工学部勤務。現在、日本大学理工学部建築学科教授。DOCOMOMO実行委員。主な共著に『近代和風を探る』、『図説近代建築の系譜』、『建築モダニズム』など多数。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

日本建築学会各賞2014

各賞受賞者 非常勤講師スペシャルインタビュー

#1 SHARE yaraicho × 内村綾乃

#2 NBF 大崎ビル(旧ソニーシティ大崎) × 山梨知彦、羽鳥達也、石原嘉人、川島範久

#3 森のオフィス × 菅原大輔

16 [REPORT]

卒業設計「在り触れる美術館」が各章受賞 | 小笠舞穂さんインタビュー

理工建築学科夏季集中授業 | 2014 年度 デザインワークショップレポート

短大建築・生活デザイン学科夏季集中授業 | 2014 年度 サマーセッションレポート

20 [NEWS & TOPICS]

受賞・出版ほか

22 [Architecture and Me]

vol.77 スカイハウスとの出会いから 大川三雄 教授

24 [EVENT REVIEW]

mosaki のイベント巡礼 vol.10

小屋展示場

SHUNKEN

2014 Oct. Vol.42 No.3

「駿建」

発行日：2014 年 10 月 31 日

発行人：中田善久

編集委員：佐藤慎也・田嶋和樹・橋本修・長岡篤・古澤大輔・中田弾・山崎誠子・廣石秀造

企画・編集・アートディレクション：大西正紀 + 田中元子 / mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

小屋展示場

2014年 5月25日(日) ~ 6月10日(日) 会期終了

日本初、小屋の展示場が都心に出現！

♥ 日本初の小屋の展示会か。都会の集住に暮らしていると、全然リアリティないんだけど……。なぜ今、小屋なんだろうね？

◆ なんでも、北米では広い家をやめて、持ち物も空間もミニマルなタイニーハウスと呼ばれる小屋に住むことが、密かなムーブメントらしいんだ。今回の小屋展示場も、テーマを「14棟の小屋で考える暮らしの見本市」としている。生活を見直す契機にしようってことだよな。

♥ どれどれ……アハハ、何これ！「In&Out&Go(号)」は、多面体の中にトイレだけがある小屋！ 中に入って座ってみたら、クラシック音楽が流れてきて。いいなあ、この籠り感。

◆ 全て廃材でつくった小屋もある。その名も「みんなでつくる、小さな暮らしの実験場」(写真1)。この小屋を企画・制作した greenz の鈴木菜央さんは、自分でも都会暮らしをやめて千葉にあるトレーラーハウスで、ミニマル生活を実践しているんだって。この小屋は、SNSなどで廃材や施工協力者を募集して、ほとんどお金をかけずに、こんなに素敵に建っちゃった。

♥ おもしろいね、すごく現代的なプロセスだ。鈴木さんたちはこの小屋を使って、断熱の実験



とか、いろんな「暮らしの実験」をしてみるつもりなんだって。実際居心地も、廃材であることが、いいエイジング効果を醸し出して。なんだか落ち着くー。

◆ 建築家の谷尻誠さんデザインの小屋「MARKET CABIN_01」は、パーツがプレカットされた DIY 仕様になっていて、素人3人がたった2日間で作り上げたのだそう。

♥ 「一畳ハウス」は、単純な家型をした、小さくてシンプルな、かわいい小屋だね。あ、この小屋をデコレーションするワークショップがあるって！ 私行ってくる！

◆ (全然興味なかったけど……) どうだった？

♥ すごく楽しかった！ 自分のものじゃないのに、塗ったり貼ったりしているうちに、すっかり愛着が湧いちゃった(写真2、3)。小屋って、全部自分で手がけて組み立てて、思うように設えて。そうやってどんどん自分自身が表れていく、分身みたいな建物なんだね。



◆ 大がかりにならざるを得ない建築物と違って、いくらでもやり直せるし、誰でも気軽に自由に、かつディープに空間と向き合うことができるもね。

♥ 会場には平日でも1,000人を超える人々が訪れていたんだって。老若男女、中には地方から見に来るお客さんも。みんな楽しげだったのが印象的。日本での小屋の可能性がここからはじまるような、そんな展示場だったよね。

Recommend | 2014年10月 - 12月

【1】「ザハ・ハディド Zaha Hadid」| 東京オペラシティ アートギャラリー |

会期：2014年10月18日(土) ~ 12月23日(火・祝)

新国立競技場で話題のザハ・ハディドの大規模展覧会は、日本ではこれがはじめて。ザハのはじまりは、アンビルトの時代。その時期の膨大なリサーチにもとづいて描かれたドローイングから、世界各地で建てられるようになった実作の設計、スケールを横断するプロダクト・デザインを含め、展示空間全体を使ったダイナミックなインスタレーションで紹介。

【2】「ジャパン・アーキテクト 3.11 以後の建築」| 金沢 21 世紀美術館 |

会期：2014年11月1日(土) ~ 2015年5月10日(日)

2011年の東日本大震災が、建築界にどんな意識の変化をもたらしたのか。単に建築物を強化するだけではなく、人と人との繋がり、地域と人の関係といったソフト面からのアプローチにも大きく着目されはじめました。さらに原発事故と関連したエネルギー問題、少子高齢化や公共施設の統廃合など、さまざまな問題を抱えるこれからの日本において、建築家がどのような役割を果たし、どのような未来を描こうとするのか、25組の建築家たちの取り組みを紹介。金沢で建築展もめずらしい。ぜひ行ってみよう！

【3】「活動のデザイン展」| 21_21 DESIGN SIGHT |

会期：2014年10月24日(金) ~ 2015年2月1日(日)

社会が抱える課題を読み解き、問題を解決しようとする意志や活動に目を向け、社会との新しい関係を築く提案、現在から未来を見通すリサーチを取り上げる。11ヶ国・24組のクリエイターによる多彩な活動は、ものづくりという枠組みを超え、今後の社会におけるデザインの役割にどんな気づきをもたらすのか。変動する世界におけるデザインの可能性を感じる展覧会。

【編集後記】

今回は、はじめて先生自身が、学内誌の一記者として大学の外へ出て、取材インタビューを行うということにチャレンジしてみました。学内で先生や学生の皆さんを取材インタビューするのは違い、外での取材は少しばかり緊張するものです。最寄りの駅から取材先に近づくにつれて、何を聞いたらいいのか、どう進めようかと、いろいろと妄想しながらドキドキされていたに違いありません。今回の学会賞受賞作品にまつわる3つのインタビューはいかがでしたでしょうか？ 恐らく、作品をただ見ただけではわからない、その背後にある考えや想いを、それぞれのインタビューから、いろんな形でつむぎ出せたと思います。その建築物には、どんな考えや想いが根底にあるのか？ 建築物を見ると、常に、そんな疑問の姿勢を持てていると、どんどん世界が広がっていくのだと思います。是非みなさんも、そんな姿勢を意識的にトライしてみてください。

(大西正紀 + 田中元子 / mosaki)